

逆転の発想

「伏流水」130302

1990年、ウエンディ・コップによって設立されたアメリカの「TFA (Teach For America)」は、世界で最も優れたNPO団体の一つです。彼女はプリンストン大学の卒業論文「教育困難地域の教育」に書いた知見をそのまま実践するため、このNPOを設立しました。

その活動は、米国の大学卒業生を2年間にわたって教育困難地域の公立小中学校に教員として派遣し、収入の少ない家庭の子供たちを大学に進学できるように支援する、というものです。つまり、「貧困の世代間連鎖」を断ち切ることがこの団体の活動の中心です。設立以来現在までに3万人を超える新卒大学生を全米43地域の千六百の学校に派遣してきたそうです。彼らが掲げるコンセプトは、「子供たちが不当な教育を受けた結果将来必要となる米国の公的支出の増加」を削減するというものです。この「否定形の否定」という論理はいかにもアメリカ的で、私たち日本人の耳には実に新鮮に聞こえます。

貧困の世代間連鎖を断ち切ることは、単に切ることで終わらず、これによって子供たちが教育機会を得て逆に社会的に貢献できるため利益が社会に還元してくる正のスパイラルが生まれることです。いま、国会では「子ども手当」をめぐる論戦が戦わされていますが、攻めるも守るも、このような発想は薬にしたくも存在しません。発想の貧困さが悲しくなります。

TFAに関して驚くべきことは、TFAが全米一流大学のいわゆる文科系学生の就職希望ランキングでナンバー・ワンだということです。それもそのはず、一筋縄では手におえない子どもたちと真剣に向き合って、子供たちの学力向上を成し遂げる指導力と問題解決能力を持った人材は、一般企業にとって喉から手が出るほど欲しい社員です。結果、2年後に引く手あまたの就職が待っています。プラグマティズムを標榜するアメリカの大学の秀逸さの一端です。「一流企業」病に侵されている日本の就活事情を見るにつけても他山の石にしたいものだとしみじみ思います。